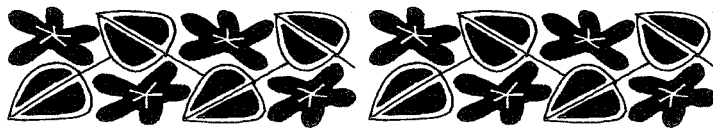


〈2023年10月21日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉

伊藤雄馬 著

『ムラブリー文字も暦も持たない狩猟採集民から 言語学者が教わったこと』に参加して



五ノ井 蘭

私は大学で言語学を専攻しているので、海外での言語調査、フィールドワークや絶滅の危機に瀕している言語に関する研究に関心がありました。言語は文化の一部であり、その多様性を理解することが重要であると考えています。ある日、伊藤先生のムラブリー(※)のご研究について知り、そのフィールドワークでの話を聞きたいと思い、「図書室のつどい」に参加することにしました。伊藤先生は、ムラブリーのコミュニティで生活し、言語や文化を研究されています。

伊藤先生の話から、私は多くのことを学び、驚かされました。まず、研究対象であるムラブリーの言語コミュニティには500人しかいないにもかかわらず、方言が存在することに驚きました。方言は人数が多いか少ないかには関係がなく発生していることを知りました。言語の多様性は、コミュニティの違いや背景によって形成され、それが言葉にも表れているということも理解しました。また、特に驚くべきことは、その方言が地名や

地域名ではなく、「A・B・C」と呼ばれていたことです。この名前は、他のコミュニティと区別するために、そのコミュニティ自身によって付けられたものであり、自然に発生したわけではないことにも驚きました。

さらに、数詞に関する違いにも驚かされました。このコミュニティの人々は「1、2、3、いっぱい」と数える方法を使用しており、これは「無限∞」まで表現できる私たちの数え方とは大きく異なります。現代の日本人は年齢、日付、お金など、日常生活の中で数ばかり数えて生きていることに気づかされました。ムラブリーの言語で3以上が単語として存在していないわけではなく、使わないという選択をしていることや、数字を覚えていくことが知識を誇示するパフォーマンスになることなど、ムラブリーの人々は数字に対する考え方が異なり、数字を使う文脈も異なることを知りました。

伊藤さんのご研究から、「未言語(言語未満な現象)」とい

う概念についても学びました。研究というのは身近な問題や疑問に対して探究し、それについての洞察を得ることができるということを示唆しています。ある現象に対して名前をつけたり、そのメカニズムを解明することへの面白さを実感しました。未言語の研究は、私たちの日常生活においても役立つ知識を提供し、将来には、新たな視点を開くことができると感じました。今後とも研究が進み、新たな発見があったらまた話を聞いてみたいのです。

この経験を通じて、新たな視点や価値観を知ることができました。興味深い研究について、お話の面白い素敵な先生からご講演いただけて、とても楽しかったです。また機会があれば参加したいと思います。

(集英社インターナショナル)

※「ムラブリー」とはタイやラオスの山岳地帯に住む少数民族。その言語は、ユネスコから話者のいなくなる可能性のある「危機言語」に指定されている。

ブッククラブから

小川洋子 著 『約束された移動』 を読んで 庄司 沙絵

表題作を含め6つの短編からなる小川洋子の本作を読み終わった後、私のなかに相反する奇妙な感覚が同居していた。一つは心がしんとして静かに落ち着いている感じ。目の前には問題が山積みだけれど、ひとまず今日は安心して眠っているんだよ、と言われたような感覚である。

もう一つは、心がざわついて落ち着かない感じ。得体の知れない怖さにくっすらと覆われ、いくら大丈夫だと言いつつそれでもゾワゾワした感覚から逃れられないのだ。なぜだろう？

6つの短編に共通する要素といえば、主要な登場人物が何らかの仕事を持ち(あるいはかつて持っていて)、助けを必要とする人にさりげなく手をさしのべ、相手を安心へと導くことに注力していることがあげられるだろう。描かれた職業は、ホテルの客室係、病院の案内係、デ

パートの警備室の迷子係、託児所の園長、希少語の通訳などである。「寄生」という作品の主人公が巻き込まれるのは仕事ではないけれど、見ず知らずの老婆に「迷惑行為」を受けながらも、結局は老婆が施設に帰るのを見届けるという役割だ。

コロナ禍でケア労働が注目されたが、子どもや高齢者やしょうがい者をケアする労働現場はもとより、どんな立場であれ、目の前にいる人間の望むかたちを慮って行動することが、本来ケアと言われる領域なのだとすることに気づく。「ケアラー」たちの働きによって、子どもは

安心して本の世界に耽ったり、思う存分涙で顔を濡らしたり、大人の首に巻きついたり膝によじ登ったりして戯れる。登場人物たちの子どもへの関わりから、自分も無垢な部分を守られているような感覚に浸ることで、最初の読後感がもたら

されたのかも知れない。しかしながら、登場人物たちの行動には、どこか常軌を逸しているようなところもあるのだ。

例えば、ホテルの客室係は宿泊客だったハリウッド俳優が抜き取った本を何度も読み、彼の出演作の同じ場面を何度も観続ける。病院の案内係はダイアナ妃が着たドレスの再現に没頭し、それを身につけて街のショッピングモールにくり出す。託児所の園長は子どもたちにお話をせがまれると、黒子羊の死に方を繰り返し話して聞かせる。

想像するに、あらゆる人々に心を砕いてきた人たち自身は、人生のどこかで負った傷を誰からもケアされないまま、孤独に歳を重ねてきたのだろう。何かに没頭したり、異常な執着やこだわりを持つたりすることが自己治癒として機能

して、それが読み手にも小さな棘として突き刺さってしまうのではないか。講師の小平麻衣子先生は、ある場面を取り上げて、託児所の園長は子どもが大

人になっていくことを、「成長」ではなく、「死」と捉えているのではないかと、いう解釈をされていた。ここでいう死とは、幼児性が失われることを指しているのだろう。子どもたちの無垢な部分を、自分のためだけにいつまでも凍結してしまいたいという、アディクシオン(依存症)のような欲望。もしかしたら、登場人物

たちは献身的な閉じた世界を作り上げることで、自分自身を癒す手段にしていたのでは、と思えてくる。怖さの正体は、思った以上に闇が深いようだ。

(河出文庫)



新着図書から

〈総記〉

生きるための絵本 正置友子(風間書房) 019
南京事件と新聞報道 上丸洋一(朝日新聞出版) 070

〈哲学 心理学 宗教〉

イスラムと仲よくなれる本

森田ルクレール優子(秀和システム) 167

〈歴史〉

関東大震災と民衆犯罪 佐藤冬樹(筑摩書房) 210
聞き書き・関東大震災 森まゆみ(亜紀書房) 210

〈社会科学〉

森と魚と激戦地 清水靖子(三省堂書店/創英社) 302
フェミニスト経済学 長田華子(有斐閣) 331

外国にルーツを持つ女性たち 嶋田和子(コウ出版) 334
近代日本メデア史1・2 有山輝雄(吉川弘文館) 361

トランスジェンダー入門 周司あきら(集英社) 367
家族と厄災 信田さよ子(生きのびるブックス) 367

「家庭」の誕生 本多真隆(筑摩書房) 367
焼き芋とドーナツ 湯澤規子(KADOKAWA) 367

障害があり女性であること 土屋葉(現代書館) 369
知的障害・自閉の人たちと「かわり」の社会学 三井さよ(生活書院) 369

公民館で学ぼう 長澤成次(国土社) 379
〈自然科学〉

ソバとシジミミチヨウ 宮下直(工作舎) 468
ウンコの教室 湯澤規子(筑摩書房) 481

鳥はなぜ集まる? 上田恵介(東京化学同人) 488
安楽死が合法の国で起っていること 児玉真美(筑摩書房) 490

〈工業〉

東京暗渠学 本田創(実業之日本社) 517

風景をつくる(こ)ほん 真田純子(農山漁村文化協会) 518
多拠点で働く 西田司(ユウブックス) 518

〈産業〉

農の力で都市は変われるか 小口広太(コモンズ) 612
ニッポン美食立国論 柏原光太郎(日刊現代) 689

〈芸術〉

「ピアノを弾く少女」の誕生 玉川裕子(青土社) 762
バレエの世界史 海野敬(中央公論新社) 769

子どもたちに映画を! たひらみつお(ホーム社) 778
〈言語〉

言語の本質 今井むつみ(中央公論新社) 801
言語哲学がはじまる 野矢茂樹(岩波書店) 801

ともに学ぶ「せかい」と「にほんご」 松尾慎(凡人社) 810
〈文学〉

借家と持ち家の文学史 西川祐子(平凡社) 910
三浦綾子の生涯 村田和子(未知谷) 910

村上春樹研究 横道誠(文学通信) 910
吉村昭と津村節子 谷口桂子(新潮社) 910

アウターライズ 赤松利市(中央公論新社) 910
大江健三郎同時代論集3 大江健三郎(岩波書店) 910

親密な手紙 大江健三郎(岩波書店) 910
鬼門としての韓国行 金石範(三元社) 910

成熟スイッチ 林真理子(講談社) 910
記憶の歳時記 村山由佳(ホーム社) 910

『源氏物語』の薫りを読む 吉海直人(新典社) 910
ちっちゃな捕虜 リーセ・クリステンセン(高文研) 930
ジャコブ、ジャコブ

ヴァレリー・ゼナッティ(新日本出版社) 950

図書室のイベント

トトはなぜ

宇宙に魅かれるのか

一天からの文を読み解く

お話 縣 秀彦(国立天文台)

夜空の星を見上げると、落ち込んでいた気持ちもスーッと薄まっていく……。誰しもそんな経験をお持ちかもしれません。いったい宇宙はどこまで広がっているのでしょうか。くにたちの夜空の向こう、宇宙の果てまで国立天文台開発のシミュレーションソフトで旅してみましよう。

宇宙の大きさを知ること、私たちは広い視点を持つことができず。縣さんのナビゲートで「狭い壺」から抜け出して、「地球という舞台」について一緒に考えてみませんか? 春休み期間の開催です。親子(小学校3年生以上推奨)でのご参加もお待ちしております!

〈縣さんの本〉表題作(経法ビジネス新書、『面白くて眠れなくなる天文学』(PHP出版)、『地球外生命は存在する!』(幻冬舎)、『星の王子さまの天文ノート』(河出書房新社)ほか。

とき 3月30日(土)朝10時〜12時

ところ 公民館 地下ホール

定員 60名(申込先着順)

申込先 3月13日(水)朝9時

電話またはホームページより申込

公民館 ☎042(572)5141



図書室のしごと

ウンコの教室

—環境と社会の未来を考える—

お話 湯澤 規子(ゆざわ のりこ)
(法政大学)

私たちが生きていくために欠かせないものでありながら、普段はまともに語られることの少ない「ウンコ」。しかし、講師の湯澤さんは衣食住に「便」を加えた視点で世界を見渡すことで、思いがけない発見があるといえます。

今回は表題の書籍の中心に、学校でウンコがしにくいという課題や、トイレをめぐる各国の事情、ウンコと食物の循環、そして私たちが「ウンコと生きる」ということなど、多岐にわたる探求についてお話いただきます。

ウンコという身近な切り口から、環境と社会の未来を一緒に考えてみませんか。

〈湯澤さんの本〉表題作(ちくまプリマー新書)、『おふくろの味』幻想 誰が郷愁の味をつくれたのか(光文社新書)、『焼き芋とドーナツ 日米シスターフード交流秘史』(KADOKAWA)、『7袋のポテトチップス 食べるを語る、胃袋の戦後史』(晶文社) ほか

とき 4月20日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 60名(申込先着順)

申込先 3月14日(木)朝9時〜

電話またはホームページより申込

公民館 ☎042(5)72(5)141



〈私の本棚から 第6回〉

レベッカ・ブラウン 著
柴田元幸 訳

『体の贈り物』



山下 幸代(やまの さちよ)

私がこの本を初めて図書館で手に取ったのは、訳者の名を見て、興味を持ったからだ。

訳者の柴田元幸さんはアメリカ文学者として大学の教壇に立ちながら、自らも短編小説やエッセイを書かれている。訳された本も、少し現実離れた不思議な雰囲気を持つものが多く、楽しく読めた。しかし、この本を読んだ時は、それまでとは違う世界で驚いた。

この『体の贈り物』は、一人のホームケア・ワーカー「私」が、エイズに感染、発病し、死を目の前にし少しでも安らかに過ごせる様にとホスピスへの入居待ちをしている患者のケアをする話である。

二百ページほどのこの小品は、十一章からなり、担当する患者、リックやコニー達と「私」とのやりとりが描かれている。「私」の仕事は、買い物、部屋の清掃、食事や薬の用意や介助、体の清拭等。あとは話し相手をし、求められると自分のことも話す。その間、「私」は忠告めいたことは言わず、相手が今まで出来たことを出来なくても責めはしない。リック達は、日、一日と死に向かっていく

ことに怯えながらも、それでもまだ出来ることを探す。「私」は彼等に寄り添い、助けながら、そっと涙を流す。

どの章も、まるでドラマの一場面を見ているように静かに過ぎていくのだが、読み終わるとどこからも何かしらの感動を受ける。

作者レベッカ・ブラウンは他にも小説を出しているが、介護を扱った作品には自分の母親の最期を看取った『家庭の医学』がある。何年か実際にホームケア・ワーカーとして活動したことからこれらの作品が生まれたと言われている。

この本を初めて読んで、何年か後に書店で文庫版を手に入れ、時々、読み直している。その都度、この「贈り物」の意味を考える。

どんなに力を失い、弱くなっていく人間でも、人間として尊重されることがいかに大切かということ。そして、最後まで自分らしく生きていこうとする姿が、そばで見守る人にとってどんな「贈り物」として残されるのか。

毎日の生活に疲れた時、気持ち落ち込んだ時など、そっと勇気を与えてくれる本だと思う。「人間っていいものだよ。生きているって素敵なことだよ。」

(新潮社)

係から

山下さんの「私の本棚から」は今回が最終回です。毎回これまで大切に読んできた本を丁寧に紹介していただきました。本当にありがとうございました。